

館蔵品展「昔の道具とくらし」出品目録

〔会期: 令和2年2月1日(土)~7月12日(日)〕

当館では長く後世に高岡の歴史文化を伝えるために、日頃、郷土の歴史・民俗・伝統産業などに関わるさまざまな資料を収集しています。

収集したそれらの資料は調査・整理し、適切に保存・管理して、その成果を展示や教育普及（講演・講座など）、情報公開などに幅広く活用しています。

本展では、当館が収蔵する衣・食・住をはじめとした古い生活道具類「民具」に焦点をあて、それぞれの民具がもつ歴史や用途に加え、その時代を生き抜いた人々の暮らしぶりについて展示・紹介します。明治・大正・昭和・平成と時代が進むにつれ、私たちの生活様式も大きく変化してきました。そうした変化を、民具をとおして当時の生活を再発見していただく機会になればと考えております。

最後に、本展開催にあたり貴重な資料をご寄贈いただきました皆様、関係各位に厚く感謝申し上げます。

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	備考	所蔵先 (寄贈者名)
1	すげがき 菅笠		1	径52.0×高 12.5	主に雨具や日よけに使われた。高岡市福岡地域では、古くから菅が栽培され、その菅で笠が生産されてきた。平成21年(2009)には「越中福岡の菅笠製作技術」として、国の無形民俗文化財に指定された	当館 (神保成伍氏)
2	カンカン帽 ぼう	大正中～昭和初期	1	径20.6×高 9.6	麦藁(むぎわら)帽子。麦藁をプレスして、糊(のり)やニスなどで塗り固めているため、軽くて丈夫である	当館 (富田保夫氏)
3	子供用着物(四ツ身紋付) あわせ 袷	昭和前期	1	丈112.7× 裾55.9×袖 丈72.9	七五三などで使用したものと思われる。四ツ身は主に4～12歳頃の子供用の着物のことをいい、並幅の反物から子供の身長(の)の4倍の長さの布をとり、それらを縫い合わせて作られる	当館 (手崎純子氏)
4	モジリ(巻袖) まきそで		1	身丈83.0× 裾60.0	女性用の仕事上着。袖口が細いため、仕事(の)がしやすく、重ね着もできる	当館 (吉田元太郎氏)
5	そでなし 袖無し		1	身丈63.0× 裾39.0	袖がない腰丈ほどの短い上着。農作業時(の)や、少し寒い時に作業衣や着物の上に着た。「ドーゲン」ともよばれる	当館 (藤田よしえ氏)
6	もんぺ		1	丈80.0×腰 回94.0	女性の農作業用の野良着。戦時中からの女性の日常着だった	当館 (国奥定治氏)
7	たらい 盥		1	径60.0×高 22.5	洗濯用の盥。夏は盥でスイカやビールを冷やすのにも使われた	当館
8	洗濯板(せんたくいた)		1	幅55.0×奥行 55.0×厚 1.6	洗濯盥に湯や水を入れて、洗濯板を立て掛け、衣類を板の凹凸(おうとつ)の溝にこすり合わせて汚れを落とす。女性の大切な嫁入道具の一つでもあった	当館 (谷道俊雄氏)
9	洗張板(あらいはりいた)		1	幅189.6× 奥行40.6× 厚1.7	着物などを洗濯する際には、着物をほどいて布の状態に戻して洗う。洗い終わった布は糊付けをし、濡れているうちに洗い張りの板に張りつけて乾かす	当館 (日尾清作氏)
10	写真「盥と洗濯板で揉み あら 洗い」(複写)	昭和30年代 以前	1	—	盥に水を入れ洗濯物を浸けて、しゃがんで洗濯板を使い、石鹸(せっけん)をこすりつけながら揉み洗いする	【昭】
11	写真「庭に盥を出して水 遊び」(複写)	昭和47年 (1972)	1	—	盥の中で水遊びをする子ども	【昭】
12	写真「洗張板で布を乾か す」(複写)	昭和51年 (1976)	1	—	シワにならないように乾かすことができる	【昭】

13	「着物の丸洗いの図」 (複写)		1	—	着物を丸洗いする場合の手順を示したもの	【い】
14	くげだい 紵台		1	〔展開時〕 幅62.3×奥行5.0×高37.9	衣服などを縫い目の糸が表から見えないように縫う際に、布がたるまないように一端を固定して引っ張るために使用する道具。本来、掛糸の先に付いた掛針（掛針器）というものに布を挟んで留め、引っ張りながら紵ける（縫う）	当館
15	針箱		1	幅21.0×奥行20.0×高45.5	針仕事をするときを使う、針や鋏（はさみ）などの小物類を入れておくための箱	当館
16	たけかわぞうり 竹皮草履		2	幅12.0×奥行22.5	一足。竹の皮を編んだ底の部分に鼻緒が付けられた草履。底が半分ほどの長さしかない「足半（あしなか）草履」もある	当館 (富田保夫氏)
17	わらじ 草鞋		2	幅22.0×奥行13.0	一足。主に稲藁で編んだ、長時間の歩行に適した履物。足首に藁紐を巻き付けて固定する	当館
18	わらながづつ 藁長靴		2	幅10.9×奥行25.0×高34.0	一足。雪の中で履く藁製の長靴。底が草鞋になっていて、取り外しできる。爪先部分が割れており、履いてから縄で縛るため、隙間から雪が入らないようになっている	当館
19	ゲートル（巻脚絆） まききゃはん		2	—	足の脛を保護するためのもの。ラシャ（厚く密な毛織物）製の細い帯状布を巻き付ける巻脚絆。軍隊でも使用された	当館 (本房繁治氏)
20	男物用下駄		2	幅10.7×奥行23.0×高10.0	一足。雨天や雪道の歩行に履いた。差歯は減ったら差し替えた	当館 (西田弘氏)
21	子供用下駄		2	幅8.2×奥行16.8×高8.8	一足。2本歯の子供用差歯下駄	当館 (本郷与一郎氏)
22	女物用雪下駄		2	幅9.6×奥行22.4×高11.1	一足。歯の部分に鋸が取り付けられ、雪の中でも滑らない工夫がされている	当館 (横山宏平氏)
23	そうげ 箒筥		1	幅52.0×奥行45.0×高21.0	北陸や西南日本での箒（ざる）の地域名。野菜を洗ったり、研いだ米の水を切る。食材などを干すのにも使う	当館 (田中為雄氏)
24	写真「囲炉裏端（いろりばた）の風景」 (複写)		1	—	場所・氷見市内。食事時は囲炉裏のまわりにそれぞれ箱御膳を並べて食事をしたり、来客をもてなす接客の場にもなった	【氷】
25	写真「レンガ造りの竈（かまど）で料理」 (複写)	昭和32年 (1957)	1	—	竈には羽釜が2つ、真ん中には鉄鍋がのっている。写真奥にはヤカンやブリキ製のバケツが置いてある	【台】
26	「囲炉裏の図」 (複写)		1	—	自在鉤（かぎ）で吊るされた鉄瓶や囲炉裏端の様子が示された図	【イ】
27	てつびん 鉄瓶	大正期	1	幅18.0×奥行17.5×高22.5	囲炉裏の自在鉤にかけて湯茶を沸かす道具。高岡開町(1609年)当初、金屋町では鋳物師（鋳物職人）が鍋や釜、茶道具などの日用品をはじめ、鋤（すき）や鋏（くわ）などの鉄器を鋳造した。江戸中期以降になると、大型の梵鐘（ぼんしょう）や灯籠（とうろう）、小型の仏具や火鉢、キセルなどの銅器も鋳造するようになった	当館 (本沢義則氏)
28	写真「囲炉裏に置かれた竈（かまど）にかけられた羽釜（はがま）」 (複写)	昭和34年 (1959年)頃	1	—	手前には自在鉤に鉄瓶が下げられ、竈の焚口（たきぐち）の前には火箸（ひばし）がある。写真奥の薪（まき）を燃やしている	【台】
29	鉄鍋		1	径30.4×高17.2	囲炉裏や竈に掛けて、汁物や煮物などを煮炊きした。大鍋では大量の里芋やさつま芋などを煮る	当館

30	鉄製羽釜		1	径43.0×高 33.0	ご飯を炊く釜。竈にかけるための鰐(つば)を羽根に例えて羽釜という	当館 (筏井晴夫氏)
31	アルミ製羽釜		1	径41.0×高 33.5		
32	せいいる 蒸籠		4	—	鍋や釜の上に乗せて、もち米・団子・赤飯などを蒸す道具	当館 (金刺亀太郎氏)
33	陶製釜	昭和14～20 年(1939～ 45)頃	1	径21.8×高 15.0	戦時中の金属代用品。戦時中の「金属供出令」により、家の中にある金属製品を全て差出し、代わりに木や陶器の代用品を使うことを強制された。釜のほか、湯たんぽや枕などいろいろな代用品があった	当館 (五嶋孝一氏)
34	しゃもじ立て		1	径6.3×高 59.7	しゃもじ立ては、竹の節を用いて筒を連結したように作ったもの。台所の脇に掛けておいて、しゃもじ・はながい・箸などを挿しておくのに使われた	当館 (徳田三郎氏)
35	東芝製 電気釜	昭和30年 (1955)	1	径33.3×高 25.3	国産第1号の電気釜(炊飯器)。東芝(発明は協力会社の光伸社)製。主婦の家事労働時間を大幅に減らし、生活様式に大きな変化をもたらした	当館 (有澤康夫氏)
36	ひっ お櫃		1	径31.6×高 23.4	炊きあがったご飯を釜から移し入れて保存しておくための道具。冠婚葬祭用のものに漆塗のものもある。夏は炊いたご飯が腐りやすいので木製のお櫃は使用せず、竹製のものに入れておいた。冬は、稲藁で作った蓋付の入れ物に飯櫃を入れて保温した。	当館
37	保温ジャー「象印トップジャー」	昭和40年 (1965)発売	1	幅29.0×高 30.5	真空の二重ガラスに覆われた内部に、炊きあがったご飯を入れて保温するもの。電気がなくても保温・保冷できる「魔法瓶」の一つ	当館 (富田保夫氏)
38	写真「改善される台所」(複写)	昭和30年 (1955)	1	—	場所・山形県酒田市。タイル張りの竈、新型の手押しポンプなどがある	【台】
39	はごぜん 箱膳		1	幅31.0×奥行 31.0×高 17.0	一人用のご膳。箱の中に茶碗・箸・皿などを入れておき、食事の時に蓋をあおむけて上に茶碗を並べてご飯を食べる。食事後は中へ食器をしまっておく	当館
40	写真「箱膳で食事をする家族」(複写)	昭和32年 (1957)頃	1	—	各々が箱膳で食事をとる風景	【台】
41	写真「ちゃぶ台を囲む食卓の図」(複写)		1	—	数人が囲んで食事をする御膳。昭和戦前から普及し始めたが、多くの農家では戦後まで箱膳が使われていたという	【イ】
42	さかだる 酒樽		1	径16.0×高 34.2	酒を入れておいた道具。上げ底で漆が塗ってあるので、祝い事に使われたものと思われる	当館
43	どっくり 通い徳利(高岡通町(とおり まち)・富田醤油店)	明治末～昭 和初期	1	幅14.5×高 26.0	酒屋や醤油店が貸し出す徳利。客はこれを店に持っていき、必要なだけの量の酒や醤油を購入した。代金はつけ(後)払いで、お盆と年末にまとめて支払った。貸徳利、貧乏徳利ともよばれる	当館
44	かたくち 片口		1	径25.0×高 15.5	油や酒、醤油など液体のものを入れ、他へ移すのに使用。片側に注ぎ口をもつ。木製や陶磁器製のものもある	当館

45	アルマイト製弁当箱	昭和前期	1	縦19.3×横14.0×厚3.0	アルマイトは、アルミニウムの表面に酸化被膜を作り、錆びにくく強度を高めた加工。これまでの竹の皮や柳行李(やなぎごおり)に代わる弁当箱として、昭和初期頃より普及し始めた	当館 (邑本順亮氏)
46	はんごう飯盒	昭和15年(1940)	1	幅20.3×高14.5	炊飯器(すいはんき)を兼ねた弁当箱。当初は軍隊で使われた。中蓋(なかぶた)(掛子(かけこ))はおかずを入れるもの。または中蓋1杯の米に外蓋1杯の水で丁度良い水加減となる	当館
47	めんば	昭和50年(1975)	1	幅29.5×奥行21.5×高10.5	エゾ松を材料に作られた曲物の弁当箱。「飯輪」から「めんば」とよばれるようになったという	当館
48	鯉節削(かつおぶしけず)り		1	幅27.2×奥行13.0×高9.7	鯉節を削る道具。引き出しのついた箱の上に鉋の刃が付いている。削った鯉節は下の引き出しに入る	当館 (筏井晴夫氏)
49	蒟蒻突(こんやくつ)き		1	幅40.0×奥行10.0×高5.9	筒の中に蒟蒻を入れて、突き棒で押し出すことにより、金属製の網目から蒟蒻が細長く切断されて出てくる仕組み	当館
50	じざいてしよく自在手燭		1	幅19.8×奥行10.1×高13.2	蠟燭(ろうそく)を立てて持ち運ぶ移動用の燭台(しよくだい)。垂直に立てて鴨居(かもい)・長押(ながし)などに引っ掛ける「掛燭(かけしよく)」にもなる	当館
51	ありあけあんどん有明行灯		1	幅26.0×奥行26.0×高35.0	部屋の照明道具。持ち運びができる。油の入った皿に、綿糸(めんし)などで作った灯芯(とうしん)を入れて点火した。夜明けまで常夜灯(じょうやとう)として使用されたので、「有明行灯」と呼ばれた	当館 (斉藤尚司氏)
52	いえちようちん家提灯	昭和期	1	径44.6×高75.0	中に蠟燭を入れて明かりをとる道具。日の丸の紋が入っていることから、祭りや行事などに使われたものと思われる	当館 (米森米太郎氏)
53	がんどう強盗		1	径27.5×幅42.5	一方向を照らすための手持ち用の灯火具。「強盗提灯」の略。現在の懐中電灯に相当する。中に蠟燭を立てて使用する	当館
54	かくとう角灯		1	幅9.2×奥行9.2×高20.5	室内用照明器具。持ち歩くこともできる。家の中の移動や近所へ出かける時にも使用。電灯が普及したあとも、停電時や懐中電灯が普及するまで使われた	当館 (泉治夫氏)
55	カーバイドランプ	大正～昭和前期	1	径14.0×高28.3	カーバイド(炭化カルシウム)に水を加えると発生するアセチレンガスを燃料として使用するランプ。火力が強く、燃料の持ち運びにも便利であった	当館 (徳田三郎氏)
56	れんたん練炭コンロ	昭和後期	1	径23.4×高25.6	練炭を中に入れて使用する。風で消えることなく長時間燃えるため、屋外での煮炊きや暖をとる際に用いる	当館
57	ひばち火鉢		1	径44.6×高29.2	灰を入れて炭火をおこし、手足を温めたり、湯を沸かしたりする暖房具。石油ストーブが登場して以降、衰退(すいたい)していった	当館 (菊田明美氏)
58	とうせい陶製湯たんぽ	昭和戦中	1	幅22.9×奥行15.2×高9.4	中にお湯を入れて、手足や体を温めるための道具。やけどしないように布に巻いて、布団(ふとん)の中に入れて使った。「国策湯丹保」とあり、戦時中の金属代用品である。戦時中に出された「金属供出令(きんぞくきょうしゅつれい)」により、家の中にある金属製品を全て差し出し、代わりに木や陶器の代用品を使うことを強制されていた	当館

59	ブリキ製湯たんぼ	大正～昭和初期	1	幅32.0×奥行24.0×高9.0	身体を温めるために湯を入れて寝床で使う道具。湯が冷めないように、注水口をできるだけ小さく作り、栓をして使う	当館 (織田睦夫氏)
60	豆炭アンカ	昭和40～50年(1965～75)代頃	1	幅19.3×奥行15.0×高10.9	布団などの中に入れて手足を温める保温器。豆炭(無煙炭(むえんたん))と木炭の粉を混ぜて固めた卵型の固形燃料)の中に入れて使用する。商品名「品川アンカ」。未使用品	当館 (織田睦夫氏)
61	ハクキンカイロ	大正12年(1923)～昭和期	1	幅6.7×奥行10.1×厚1.5	懐(ふところ)に入れて腹や腰などを温める携帯用の懐炉(保温器)。大正12年(1923)ハクキンカイロ(株)より発売開始。気化したベンジンが白金(プラチナ)の触媒(しよくばい)作用で、徐々に酸化発熱するというもの。未使用品	当館 (織田睦夫氏)
62	コクヨヒーター(足温器)	昭和20年代	1	幅24.4×奥行18.7×高13.1	足を温める道具。木枠中に入っている電熱線に電気が通って発熱する仕組み	当館 (神保成伍氏)
63	写真「置炬燵(おきごたつ)の図」(複写)		1	—	炬燵槽(こたつやぐら)とよばれる木枠の中心に、行火または掘り炬燵を置き、上から炬燵布団をかけて使われた	【イ】
64	炬燵槽		1	幅50.5×奥行50.5×高37.5	中に炭火を入れた行火などをおき、布団の中で足を温めた	当館 (金刺亀太郎氏)
65	ねごごたつ(行火) <small>あんか</small>		1	幅・奥行・高各25.0	中に炭火を入れて手足を温める道具。これを覆(おお)うように槽(やぐら)をのせ、その上に布団をかぶせて暖をとった	当館 (江淵安太郎氏)
66	炭取り	明治期	1	径24.5×高32.3	炬燵や火鉢に使う炭を、炭俵(すみだわら)から小出しにして持ち運んだり、入れておくための容器。竹製	当館 (藤井喜代乃氏)
67	こて 鋺		1	幅4.5×高37.8	炭火などの中にコテ部を差し込んで熱したものを、着物などの縫い目に当て、縫ったところを伸ばしたり、折り目をつけたりする道具。「焼きこて」ともいわれる	当館 (神保成伍氏)
68	火のし		1	径11.7×長37.7×高5.4	底の滑らかな金属製の鍋の中に炭火を入れ、その熱を利用して底を布に当ててシワをのばすための道具	当館 (吉野作治氏)
69	炭火アイロン		1	幅21.0×奥行10.6×高19.7	上部の蓋を開けて中に炭火を入れ、その熱で衣服などのシワを伸ばしたり、形を整えたりする道具	当館 (室崎信一氏)
70	ナショナル スーパーアイロン	昭和2年(1927)発売	1	幅17.5×奥行14.6×高11.9	松下電器製作所(現・パナソニック)が発売した電気アイロン。電気アイロンは、明治33年(1900)頃に登場し、各家庭に普及し始めたのは大正6年(1917)頃であるとされる	当館
71	さおばかり 竿秤	【神初家】 明治32年(1899)11月購入	2	—	てこの原理を利用して重さを量る道具で、「棒ばかり」ともいう。重量を計る目盛りをつけた竿と、竿につけた取っ手の紐を支点として、先端に計量するもの(作用点)を、反対側に錘(おもり)の分銅(ぶんどう)(力点)を吊り上げ、錘を移動させて水平を保つ位置の目盛りを読む	当館 (当館、高岡源平町・神初豊一氏)
72	いちごます 一合枧		1	〔内法〕 7.0×7.0×3.8	米などの穀物や食塩、酒、酢などの容積を量る計量道具。基準となるのは一升枧(1.8L)で、その1/10が一合枧(約180ml)、一合枧×5倍=五合枧(約900ml)の容量となる	当館 (金森栄一氏)
73	五合枧		1	〔内法〕 11.9×11.9×6.3		

74	液用一合枡		1	[内法] 6.4×4.4	醤油や酢、油、酒などの液体を量る道具。 「液用一合」と焼印がある	当館
75	ぜにます 銭枡	江戸後期～ 明治初期	4	—	高岡の商家・高辻屋で使用されていた、硬貨を計量するための道具。 4点それぞれの裏面には年代や計量対象の金種などが墨書されている。 ①は万延2年(1861)購入の二朱(しゆ)金用(銭枡いっぱい)で80枚=160朱=1両)。②は長方形の一朱銀用(銭枡いっぱい)で80朱=5両)。③は二分(ぶ)判(ほん)金用。(銭枡いっぱい)で50枚=100分=25両)。④は一朱銀用か	当館 (当館、高岡源平町・神初豊一氏)
76	ホーロー看板「ヤンマー オフセット式石油発動機 販売所」	昭和中期	1	36.4×54.4	ホーロー看板は主に屋外用の表示として、珫瑯(ほうろう)仕上げで製作された鉄製看板。 ヤンマーオフセット式石油発動機は、大正14年(1925)に製造・販売が開始され、昭和12年(1937)に製造が中止された	当館 (中山武央氏)
77	せいた 背板		1	幅47.0×奥行77.0	荷物を担ぐために背負う運搬道具。稲や薪など、量の多い物を運ぶのに便利	当館 (堺喜十郎氏)
78	にないぼう 荷棒(背板用)		1	長71.5	疲れたときなど、荷物を背負ったまま荷棒を背板の下において支えて休息することができる	
79	写真「背板で麦束を運ぶ」 (複写)	昭和59年 (1984)	1	—	場所・埼玉県横瀬町(よこぜまち)	【い】
80	写真「背板で荷物を運ぶ」 (複写)		1	—	場所・氷見市内。「ショイコ」ともよばれる	【氷】
81	写真絵葉書「背板で馬肥(うまごえ)を運ぶ女性たち」 (複写)	昭和8～19年 (1933～44)頃発行	1	—	馬屋肥とは、家畜の糞尿(ふんにょう)や敷き糞などを腐らせて作る肥料のこと。庄川(富山県西部)の近辺の農村にて	当館
82	ふじみ 藤箕		1	幅58.0×奥行50.5×高12.0	穀物を選別したり、運搬したりするための農具。板製や竹製などがある	当館
83	写真「箕による粃(もみ)の選別」 (複写)		1	—	両手で縁を持ってあおり、風によって粃を選別する。稲扱(いねこ)き、粃摺(もみすり)り、精米などの秋の収穫作業全般に広く使われた。また、堆肥(たいひ)や肥料を田んぼに撒(ま)くなど、様々な用途に使用された	【写】
84	写真「踏車(ふみぐるま)で田に水を入れる」 (複写)	大正期	1	—	羽の部分に人が乗って踏むことにより、水位の低い堀から高い田へ水を上げることができる道具。高岡古城公園池の端掘(はたぼり)	高岡市
85	田下駄		2	幅15.0×奥行15.0×高5.0	一足。深田や泥田に入って作業をする際に、体が沈むのを防ぐために足に履くもの。水下駄ともいう	当館 (中山武央氏)
86	たももひき 田股引		1	丈74.0×腰回94.0	水田作業で着る丈の短い股引	当館 (吉田元太郎氏)
87	写真「田植え作業風景」 (複写)		2	—	女性が列をなして田植えを行う作業風景	【中】
88	写真「田舟を使った稲刈り作業」 (複写)	昭和42年 (1967)	1	—	場所・埼玉県所沢市。田舟は主に湿田の稲刈り時に、刈り取った稲を湿田から畦や農道まで運ぶ道具。肥料や土を運ぶのにも使用した	【い】
89	写真「鎌による稲刈り」 (複写)		1	—	皆で協力しながら、稲を一束一束刈り取る作業風景	【写】

90	写真「千歯扱きによる脱穀 <small>(だっこく)</small> 作業」(複写)	昭和30年代頃	1	—	場所・氷見市内	【氷】
91	写真「回転式脱穀機による脱穀」(複写)	昭和30年代	1	—		【高】
92	写真「唐箕 <small>(とうみ)</small> による選別作業の図」(複写)		1	—	手前にある両方の口から、穀物が選り分けられて出てくる様子がわかる	【中】
93	写真「千石通 <small>(せんごくどお)</small> しで玄米 <small>(げんまい)</small> の選別」(複写)		1	—	土臼で粳摺りをした後の米と粳を選り分ける道具。「千石通し」や「万石」ともよばれる	【写】
94	俵締め機	昭和30年代以前	1	幅67.5×高65.0	米などを入れた俵を締め付けるための俵装 <small>(ひょうそう)</small> (俵詰め)道具。三角形の部分の一边を地面に付けて立たせ、俵を輪になるように嵌 <small>(は)</small> め込み、上部にある回転歯ともう一方の鉄歯を重ね合わせ、レバーを上下させることで俵を締め上げることができる。深沢農機(株)(兵庫県姫路市保域町)製造	当館 (大垣哲男氏)
95	ほりか樹いしゅう そくたいてんじん 堀川敬周画《東帯天神座 <small>ざざう</small> 像》	江戸後期	1	122.5×49.0	高岡初の町絵師といわれる堀川敬周が描いた東帯姿の天神(菅原道真)座像。堀川敬周(1789頃～1858)は、高岡堀上町出身。天保・弘化年間を中心に活躍、初期高岡画壇の礎を築いた。山水・花鳥・人物画などあらゆる画題を修得し、多くの作品を残した。一方で、漢詩人・大窪詩仏など多くの文人墨客 <small>(ぶんじんぼっかく)</small> らと親交をもち、洒脱な俳画や風俗画も描いた。また多数の弟子も育てた	当館 (当館、高岡源平町・神初豊一氏)
96	けいさいえいせんが 溪斎英泉画《牛乗天神図》	江戸末期	1	64.9×20.3	版元は江戸の和泉屋市兵衛 <small>(いずみやいちべえ)</small> (甘泉堂 <small>(かんせんどう)</small>)。資料左上には「宵のま(間)は 都のノ空にすみぬらむノ心つくしの有あけの月」とあり、菅原道真が左遷され、はじめて博多へ上陸したときに詠んだ歌であると伝わる。溪斎英泉(1790～1848)は浮世絵師。姓は池田、名は義信、号は一筆庵・無名翁など。遊女や美人画を得意とし、多くの浮世絵や草双紙(絵入りの娯楽本)の挿絵を描いた	当館
97	天神・ <small>ずいじん</small> 随身図	明治期	1	71.2×24.0	木版多色刷 <small>(もくはんたしよくずり)</small> (錦絵 <small>(にしきえ)</small>)の作品。「天満宮」と書かれ、その下に梅鉢文 <small>(うめばちもん)</small> を配した東帯姿の天神と隨身、狛犬が描かれた図。幕末以降普及した化学染料「アニリン」(洋紅 <small>(ようこう)</small>)がみられる。版元の「山甚」の印が捺 <small>(お)</small> されており、江戸(東京)の山城 <small>(やましる)</small> 屋甚兵衛 <small>(じんべえ)</small> (山泉堂)とわかる	当館
98	写真「天神様の前で」	昭和42年(1967)	1	—	高岡(富山県西部)では、昔から長男が生まれると母親の実家から天神画像が贈られ、毎年12月25日～1月25日まで飾られる。子どもの無病息災・学業上達を祈る	【高】

99	天神堂		1	幅42.5×奥行36.9×高61.5	天神堂とは神社のミニチュア版。本殿の神座には天神座像が安置されており、外には隨身の右大臣（向かって左）と左大臣（向かって右）が控える。高岡では、天神堂は裕福な家で年末年始に飾られたという。金沢の天神堂は、参道もある小型のものである	当館 (越中総鎮守一宮 射水神社)
100	富山土人形 各種		31	—	富山土人形で作られた天神人形、隨身、狛犬、灯笼(とうろう)など。富山土人形は、嘉永年間(1848~54)富山十代藩主・前田利保(まえだとしやす)が、名古屋の陶工(とうこう)・加藤家の陶器職人・広瀬秀信(ひろせひでのぶ)を富山に呼び、千歳御殿(ちとせごてん)に窯(かま)を築(きず)き、子・安次郎が天神臥牛(てんじんがぎゅう)を焼いて献上したのが始まりとされる	当館 (越中総鎮守一宮 射水神社)
101	井波彫刻 野村清雲作 《天神木像》		1	幅36.2×奥行27.0×高33.0	国の伝統的工芸品「井波彫刻」の天神木像。胸には梅鉢文が彫られ、手には笏(しゃく)を持ち、腰には刀を携(たずさ)える。野村清雲(1888~1973)は富山県南砺市(旧井波町)の彫刻家。本名は清太郎。初代・加茂辰蔵に師事。野村家初代となる。2代の一宝ら5人の子を含め20数人の弟子を育て、井波彫刻を盛り上げた。井波の天神木像は昭和中期以降徐々に普及した	当館 (越中総鎮守一宮 射水神社)
102	本保兵蔵作「天神木像」	明治21年 (1888)	1	幅34.9×奥行20.5×高34.3	高岡源平(げんべい)町の仏師・本保兵蔵作の天神木像。細かい部分まで作りこまれた彫刻のうえに、黒漆や金箔が鮮やかに残り、髭(ひげ)や袴(はかま)の模様、刀の細部まで表現されている。本保兵蔵(?~1886)は高岡で江戸末期から昭和初期にかけて栄えた仏師(ぶっし)一族の出身。本保屋は仏像・仏具以外にも、神社(祭礼)に関する神輿(みこし)や獅子頭(ししがしら)、天神像のほか、置物や衝立(ついたて)なども幅広く手がけた	当館

※所蔵先の写真の出典は、【氷】『氷見市史』(氷見市役所, 1963年)、【中】『中田町誌』(中田町誌編纂委員会, 1968年)、【写】『写真でみる農具・民具』(農林統計協会, 1988年)、【台】『台所用具の近代史』(有斐閣, 1997年)、【イ】『イラストで見るモノのうつりかわり 日本の生活道具百科』(河出書房新社, 1998年)、【昭】『昭和のくらし博物館』(河出書房新社, 2000年)、【い】『いまに伝える農家のモノ・人の生活館』(柏書房, 2004年)、【高】『保存版ふるさと高岡』(郷土出版社, 2009年)を示します。

※資料保存のため、一部展示替えをすることがあります。写真・図・複数資料の寸法は割愛しました。

計 102件148点